○道路（深夜）
荒い息の音。住宅街の人気ない道を帽子にマスクをした外峯オリエ（３２）が全速力で走ってくる。時折、後ろを振り返るがとても足が速い。後から中年の警官がオリエを追いかけて走ってくる。
警官「待ちなさい！」

○道路（深夜）
警官が走ってくるが誰もいない。警官、あたりの住宅を目で確認しながらゆっくり歩く。

○一戸建て住宅・塀の内（深夜）
古い戸建て住宅の塀の内側に潜むオリエ。警官の動向を伺っている。向きを変えて家の裏に回る。と、懐中電灯の光を浴びるオリエ。パジャマを着た中年男性が懐中電灯を向けている。
中年男性「誰や！　そこで何しとんねん！」
オリエ、あわてて逃げる。

○道路（深夜）
逃げ出すオリエを中年男性と警官が追いかけてくる。
中年男性「待て、こら！」
警官「止まりなさい！」

○駐車場（深夜）
車の下に潜むオリエ。目の前に警官や中年男性の足。二人が去るとホッとするオリエ。手書きの地図を取り出す。
「安全なルート」とある。オリエ、腹を立てながら
オリエ「なにが安全なルート！（怒りのあま

り地図を握りつぶすがぐっと堪えて）あん・ぱん・まん！」
立ち上がって走り出す。

○一週間前・オリエの自宅
以下、一週間前。キーを叩く音。
オリエがノートパソコンで内職のネット記事を作成しながら、スカイプで戸沢桐子（５７）と話している。桐子は高そうなスカーフをしている。
オリエ「だから、お母さん！　わかってるから。もうわかってるんだから、そう何回も何回も催促するのやめて」
桐子の声「オリエはわかってないよ」
スカイプ画面の中の桐子はしきりと目頭をティッシュでぬぐっている。
オリエ「わかってる。お金でしょ？　お母さんが私に連絡するときはいつもお金。でしょ？　それ以外ないでしょ？　孫の誕生日だって知らないくせに」
桐子の声「それくらい知ってる」
オリエ「じゃあいつよ、言ってみて」
桐子の声「（ため息ついて）プレゼントもあげるお金無くて、どの面ぶら下げて孫にお誕生日おめでとうって言える？」
オリエ、醒めた目で
オリエ「そのスカーフ、いつ買ったの？」
桐子の声「これ？　もらったのよ」
オリエ「今日真央の面会日なの。もう出なきゃ」
桐子の声「ねえ、オリエ」
ノートパソコンを閉じるオリエ。心を落ち着けるように瞳を閉じている。

○坂口の家・玄関内
ファミリー向けマンション。玄関先に立ち目を丸くしているオリエ。坂口昌彦（３８）が怒りに満ちた顔で立って

いる。
オリエ「連帯保証人？」
坂口「今さっき中島って人から電話かかって来て知ったんだよ、康介くんがその人から借金して、勝手に俺を連帯保証人にしたんだよ」
オリエ、おろおろして
オリエ「勝手にってそんなことある？」
坂口「知らないよ！　てか、なんでボクなの？ボクと康介くんて君の前の夫と現夫という君を介してしか繋がりないよね？」
オリエ「待って、落ち着いて」
奥から坂口真凛（６）が顔を出す。
真凛「ママ―」
オリエ「真凛」
オリエの目の前で坂口、壁を拳で殴る。ヒッとなるオリエ。坂口、真凛を笑顔で振り返り、
坂口「真凛、ママのところに行ってなさい」
おびえた真凛、奥へ行く。
坂口「申し訳ないけど、今日の外出は中止で。この件が片付くまで君には真凛を会わせたくない」
オリエ「でも」
坂口「真凛は僕が引き取って正解だったよ」
傷ついた顔のオリエ。

○オリエの家（夜）
土下座している外峯康介（３２）。ダイニングテーブルで頭を抱えているオリエ。テーブルの上に酎ハイの空き缶の山。
オリエ「なんで？　なんで何回もうまい話に引っ掛かるの？」
康介「ごめんなさい」
オリエ「なんでって聞いてるの。しかも連帯保証人に私の前の夫の名前、それで貸してくれるっておかしなところから借りないでよ！　おかげで私が返すはめに

なったじゃない」
康介「聞いてくれ。龍二っていうのは俺の大事な親友なんだ」
オリエ「その親友に何回騙されてんのよ！」
康介「おまえは友達いないからわかんないんだよ、友達の大切さが！」
オリエ「誰のせいで友達いなくなったと思ってんのよ！」
立って歩こうとしてよろめくオリエ。
康介「大丈夫か？」
オリエ「もう嫌だ」
よろよろ歩いて寝室に行こうとするオリエ。
康介「おまえはいいよ。両親だって健在だし、子どもだっているし」
オリエ「何言ってんの？　康介にだって私がいるでしょ？」
康介、無言で出て行く。
オリエ「私じゃ足りないの？　ねえ。てか借金どうするつもりなの、ねえ？　ねえってば！」
頭に来てゴミ箱を蹴るオリエ。開いたパソコンに新着メールのアラートが表示される。「極秘バイトにご応募ありがとうございました」のタイトル。
古矢の声「この度は極秘但し高額バイトにご応募いただきありがとうございました。厳正な審査の結果、貴方にお願いしたくメール差し上げました。つきましては詳しいご説明の機会を設けたく、お手数ですが次の住所までお出でください。先に申し上げておきますが身体を張る仕事であることをご承知ください」

〇古矢誠二の家・外観
年代物の洋館。セクシーな服装で玄関ポーチに立つオリエ。呼び鈴を見てためらっている。
オリエ「身体を張る仕事……」

オリエ、踵を返して帰りかける。足を止める。悩んで顔をあげる。

オリエ「あん・ぱん・まん！」

再びポーチに向かい、呼び鈴を鳴らす

オリエ。

○同・玄関ロビー〜階段〜廊下

オリエが入ると真っ暗である。

オリエ「え、真っ暗。あの、すみません。バイトの件でお伺いしました外峯オリエです。」

シーンとしている。

オリエ「あの」

急にあたりが明るくなり、まぶしさに目を細める。子どものように見える古矢誠二（２４）が階段の上に笑顔で立っている。

古矢「お待たせしました。ようこそ」

気取っておりてくる古矢。足を滑らせ転げ落ちてくる。唖然とするオリエ。

オリエ「大丈夫ですか？」

古矢、腰を打って呻いているが、オリエの視線に気づくと気取って

古矢「どうぞ、こちらへ」

×　×　×

オリエは古矢に案内され階段を昇る。

古矢「すみません、こんなところまでお呼び立てしてしまって。駅から歩いたでしょう？」

オリエ、古矢が誰なのか訝しがる顔で

オリエ「そうですね、１０分ほど」

古矢「早いですね。僕でも１５分はかかります。陸上の選手なんですよね？」

オリエ「女子３０００メートル障害を」

古矢「たしか北京オリンピックに出られたとか」

オリエ「強化選手でした」

古矢「強化選手ということは出られたんですよね？　オリンピック」

オリエ「いえ、残念ながら選考落ちで」
古矢、露骨にがっかりした顔をする。
古矢「あー。出てないのか」
オリエ「（ムッとして）すみません。一応言っておきますけど、強化選手でもまあまあすごいですよ？」
古矢、じろじろオリエを見る。
古矢「今は何を？　コーチですか？」
オリエ「いえ。主婦です」
古矢「あ、そうなんだ」
古矢、がっかりした顔で先に階段を昇る。オリエ、ムカムカした顔。
古矢「（ひとり言）だから体がたるんでるのか」
オリエ「何か言いました？」
階段を昇った先の廊下を歩く古矢に
オリエ「あの。何か問題あるなら先に言ってください」
古矢、答えずオリエを置いて歩いていき、突き当りのドアの取っ手に手をかける。
古矢「どうぞ、こちらです」
オリエ、ムッとした顔で古矢の元へ歩く。オリエが到着したと同時に古矢はドアを開け、中を示す。オリエ、中に入ろうとするが、踏み出そうとした先に床が無いことに気づき悲鳴をあげる。
オリエ「ああっ！！」
古矢にしがみつくオリエ。
古矢「おっと危ない」
オリエ、古矢を見る。古矢、にっこり。
オリエ「なんですか、これ？　お帰りはこちら？　口で言ってよ！」
古矢「いえいえ、説明会会場が一階なだけです」
ハッとして見るオリエ。目の間に太い綱が垂れており、地上まで伸びている。綱の端の先にはマットレス。地面と古矢を見比べるオリエ。
オリエ「わかりません。責任者呼んでください」

古矢「お願いしたい仕事は運動神経がいるんです」
オリエ「（驚いて）え？」
古矢「僕がクライアントです」
オリエ「嘘でしょ。あなた未成年だよね？」
古矢「（ムッとして）これでも成人です」
オリエ「成人年齢１８歳だから？」
古矢「２４です。童顔で悪かったな。どうしますか？　バイトに応募されたということはお金がいるんですよね」
オリエ、キッと振り向き
オリエ「あのね」

×　×　×

マットレスにオリエのヒールが落ちる。空中に向かって開いた二階のドア。屋上から垂れた綱にオリエがしがみついたまま、揺れて悲鳴を上げている。
オリエ「無理。無理。無理」
ドアから古矢が呼びかける。
古矢「外峯さん、早く下りないと腕が痺れて落ちるよ」
オリエ「無理。お願い、引き上げて」
古矢「大丈夫、下にマット敷いてるから。がんばって」
必死で綱にしがみつくオリエ。手がすべり、落ちて行くオリエ。悲鳴。
オリエ「ぎゃー」
古矢「あーあ。（ぽつり）人間、落ちるのって早いな」
マットに大の字になっているオリエ。

○古矢の家・応接室
オリエはソファに寝かされぐったりしている。守咲実衣（２９）がオリエをじっと見ている。実衣の片腕にはびっしりとタトゥーが入っている。道場雪乃（１６）は部屋の隅にしゃがんでいる。浅井健太（４７）はしきりと顔をさわりながら部屋の中を見て回ってい

るが、実衣の腕のタトゥーに気づき、
じろじろ見る。実衣、舌打ちする。
実衣、オリエを見て
実衣「大丈夫っすか？」
オリエ、力なくうなずく。
実衣「おばさんにはキツイっすよね」
オリエ、実衣をにらむ。実衣、雪乃に
向かって
実衣「こっちおいで？」
雪乃、おびえたように首を振る。
実衣「あんた高校生じゃないの？　よくこん
な怪しいバイトに応募したね？」
雪乃「お金が欲しくて」
浅井は無言。オリエはうなずく。
実衣「あたしも。お金欲しい。あの子、あた
したちに何させるつもり。Ｈなこと？
きゃー。（浅井を見て）それはないか。
じゃあ、何かやばいこと？　ヤク運ば
されるとか？」
オリエ「さすがにそれは」
実衣「え、どうして？　普通にあるっしょ」
不安な顔をするオリエと雪乃。浅井は
平然としている。
オリエ「これで全員なのかな？」
実衣「この中から一人じゃない？」
オリエ「ここからまた選ぶの？」
浅井「実戦かな」
ニヤッと笑って実戦の構えをする浅井。
実衣、あきれたように
実衣「女ばっかじゃん。そんなわけないよ」
浅井「俺男だけど？」
実衣「てか実戦っておっさん、弱そう」
浅井「は？　アマレスだぞ？」
浅井、技をかけようとするが実衣、ひ
らりとすりぬける。浅井、驚いて
浅井「素早いな」
実衣「パルクールやってるんで」
雪乃、急に身を乗り出し、
雪乃「パルクールって、あの屋上から屋上へ
飛んだりするやつですか」

実衣「そだよ」
雪乃「かっこいい。私、やってみたいんです」
実衣、にやっとして「あなたは？」の動作。
雪乃「ボルダリング。小さい時から」
浅井「自転車かあ。いいね、のんびりしてて」
浅井を見て鼻で笑う実衣。
浅井「なんだよ」
実衣「壁登んだよ、ボルダリングは。自転車はポタリング。おっさんは知らないか」
浅井「おっさんで悪かったな」
大きく溜息をつくオリエ。
オリエ「私、負けだわ」
実衣「おばさんは何かやってた？」
オリエ「おばさんおばさん言わないで」
実衣「おばさん、見たとこ普通な感じなのにお金困ってるの？」
オリエ、実衣を見て
オリエ「そう。困らされてる」
実衣、うなずき
実衣「あたしも」
浅井、無言。雪乃うつむく。
実衣「しかし豪邸。ドラマだとさあ、だいたいこの後、ご馳走が出てくるパターンじゃないかな」
浅井「毒が入ってるやつだ」
実衣「オヤジの分にだけね」
腹の音が鳴るオリエ、雪乃も盛大に腹の音が鳴る。
扉が開き、古矢がニッコリ立っている。
実衣「ご馳走じゃない」
× × ×
古矢が全員の顔を見回している。
オリエ「つまり盗むってこと？」
腰の痛みに呻くオリエ。他の者はあまり驚かない。
浅井「そんなことだろうと思ったよ」
実衣「やっぱそうだよね」
オリエ「マジか」
古矢「はい、マジです」

浅井「なかなか無いよ、一回３０万のバイトは」
オリエ「でも平気なんですか？」
浅井「まあ、覚悟してたかな？」
オリエ、古矢に詰め寄る。
オリエ「古矢さん。マジのマジで泥棒しろって言ってるなら警察行きます」
古矢、笑顔で
古矢「正確には『泥棒』ではありません」
オリエ「でも『盗む』んですよね」
古矢「『取り返す』んです」
オリエ「つまり『盗む』んですよね」
古矢「あ、そうだ、報酬の欄に記載ミスがありました」
怒りの顔で古矢を見つめる面々。
実衣「ちょっと待ってよ」
浅井「まさか三万？　それはないよ」
実衣「あたし帰るわ」
オリエ「ちょっと落ち着いて」
古矢「こちらです」
古矢の示した金額に全員静まる。にっこりする古矢。
実衣「やる。やるわ」
浅井「おお、すげえ」
実衣「でもほんとに？　あんたさあ、大口叩いてほんとに払えるの？」
古矢「ご心配なく。（スーツケースを開け現金を見せる。全員おおっとなる）外峯さん、どうします？　帰るなら出口までお送りします」
オリエ「もし警察に捕まったら？」
不安そうなオリエの顔。
実衣「自信ないならやめたら、おばさん」
オリエ、実衣をにらむ。現金と古矢の顔を見比べる。
古矢、意味ありげな微笑みを浮かべる。
荒い息遣いの音。

○現在・アパート・外観（深夜）

以下、現在。荒い息遣いの音。オリエがアパートによろよろと入っていく。

○浅井のアパート・内（深夜）

六畳間に雪乃、浅井、実衣が座り、それぞれ何かしているがオリエがドアを開けると顔を上げる。古矢が顔を出し、オリエにストップウォッチを差し示す。

古矢「５５分。２５分オーバーです」

実衣「おそ」

オリエ、無言で入ってきて座っている人間を踏み越えて奥へ行こうとする。

実衣「ちょっとなに」

オリエ「わたしの荷物」

雪乃がオリエの荷物を胸に抱く。

浅井「雪乃ちゃん、飲み物とって」

実衣「（オリエに）座んなよ」

オリエ「いい、もう帰る。荷物返して、雪乃ちゃん」

浅井「てか、どうだったのよ。ちゃんとフィードバックしようよ、帰るのはそれから」

オリエ、きっと浅井を振り返って

オリエ「なにが安全なルートよ。警官と鉢合わせしたわよ。あれも計画なの？　フィードバックが聞いてあきれるわ」

実衣「おばさん、うるさい」

オリエ「おばさんって言わないで」

実衣「おばさんじゃん。イキってんじゃないよ、ババア。騒ぐなら３０分切ってこいよ」

オリエ、悔しそうに黙る。実衣、にっこりして、オリエを軽く叩く。

実衣「ごめんん。言い過ぎた、ごめんね。座ろうよオリエさん」

オリエ、渋々座る。

浅井「ま、実際オーさんが一番難しいルートだったけどね」

オリエ「はあ？」

実衣「そうなの？」

古矢「意外だったなあ。オーさんもっとイケるかと思ったのに」
浅井「女子３０００メートル障害？　やっぱブランクあるとなあ」
古矢「年のせいもあるかも」
オリエ「むかつくむかつくむかつく」
雪乃のお菓子を奪いガツガツ食べるオリエ。
雪乃「オーさん、全部食べないで」
古矢「やっぱり新メンバーかな？」
浅井「新メンバーかー」
実衣「新メンバーなら男にしてよ」
仲良さそうに話す浅井と古矢。実衣、オリエと雪乃に寄って、古矢たちを指し示し
実衣「仲良すぎじゃない？　知り合い？」
オリエ「知らないよ」
オリエ、古矢たちを見る。浅井、オリエたちに向かって手招き。
浅井「お嬢さん達。大先生から計画発表です」
オリエたち、顔を見合わせ古矢たちの元へ。
古矢「ターゲットはある夫婦です」

○山道
山道を一台の高級外車が行く。

○外車・内
ハンドルを握る江原義道（６４）。助手席に座る江原愛梨（２６）。愛梨の胸元には宝石のついたネックレスが光る。
愛梨、隣の夫をチラッと見る。
江原「何か心配事でもあるのか？」
愛梨「（ドキッとして）どうして？」
江原「朝からずっと浮かない顔をしてる」
愛梨「あ。そうかな。緊張してるのかも」
江原「知らない人に会うのが苦手だからね、愛梨は。大丈夫、ボクの後ろに隠れてれ

ばいいさ」
微笑む江原。愛梨はうなずくが、表情が硬い。

○結婚式場・外観
高原の結婚式場。江原の外車が停まり、江原と愛梨が降り立つ。

○同・内
珍しそうに辺りを見回す愛梨。愛梨に目を細める江原に式場スタッフが近寄る。
スタッフ「江原様、お待たせしました。こちらへどうぞ」
スタッフが江原を案内する。愛梨もあわててついていく。後ろから現れる古矢。江原達が立ち去った方をじっと見る。

○同・新婦控室
ドアに「御新婦様控室」の表示。愛梨がウエディングドレスを着て、きょとんとしている。胸元には例のネックレス。タキシードを着た江原がノックして入ってくる。愛梨、江原を見て
愛梨「義くん」
江原「愛梨、綺麗だ」
愛梨、江原に抱きつく。
江原「これこれ」
愛梨「だって、私たち式は無理だって思ってた」
江原「(キスをして)愛してるよ。ぼくら二人きりで式を挙げるんだ」
愛梨「うれしい」
江原「式場でね」
江原、控室を出る。
愛梨、うれしそうに涙をぬぐう。

カーテンで仕切られた隣の部屋で聞いているオリエ。

○同・廊下

江原、廊下を歩いていて、古矢に気づく。

江原「おお、誠二くん。来てくれたのか」

古矢「僕だけですけど」

江原「いいんだよ。彼女のご両親には結局許してもらえなかったしね。従弟の君だけでも参列してもらえたら彼女も喜ぶだろう」

古矢「愛梨姉ちゃんは」

江原「（奥を指して）新婦控室だ。綺麗でぶったまげるぞ」

古矢、笑顔で江原と別れて新婦控室へ向かう。笑顔が消える。

○同・新婦控室

ドアの開く音に顔を上げる愛梨。カーテンで仕切られた隣の部屋にいるオリエも顔をあげる。愛梨、古矢が立っているのに気づくと恐怖の表情。逃げようとするがドレスがからまって転ぶ。古矢が愛梨を抱き起す。震えながら必死で逃げようとする愛梨。

古矢「愛梨姉ちゃん」

愛梨「誠二くん、お願い来ないで」

古矢「姉ちゃん、誤解だよ」

愛梨「来ないで」

泣きながら腕を振り回す愛梨を古矢、黙って立って見ている。

古矢「愛梨姉ちゃん、姉ちゃんは僕が姉ちゃんのことを付け回してたって思ってるの？　ほんとに？」

愛梨、黙っている。

古矢「小さい頃から弟みたいに面倒みてくれたよね。本当のお姉ちゃんみたいに。僕、

姉ちゃんに感謝してるよ。そんな姉ちゃんを苦しめることなんか絶対にない」
愛梨「誠二くん」
古矢「あいつだろ。あいつが僕のことを悪く姉ちゃんに吹き込んだんだ。姉ちゃんを手に入れるために」
愛梨、激しく首を振る。
愛梨「誠二くん、それは違う」
古矢「僕は決めたんだよ、姉ちゃん。姉ちゃんをここから連れて帰るよ。待ってて」
古矢は愛梨に囁くと姿を消す。隣の部屋のオリエ、混乱している。
愛梨「どうしよう。どうしよう。どうしよう」
愛梨、震えていると、そこへ浅井が入ってくる。
愛梨「先生！」
浅井「誠二、来た？」
愛梨「来た。どうなってるんですか」
浅井「数人で君たちを襲うことになってる」
隣の部屋のオリエ、ギョッとする。愛梨、真っ青になって
愛梨「ええ！？」
浅井「大丈夫（愛梨に耳打ちする）」
愛梨、震えながら浅井を見つめる。
愛梨「先生を信じます」
浅井、微笑んで
浅井「信じて」
浅井、去る。愛梨、目をつむり息を整える。隣の部屋のオリエ、混乱しながら部屋を出る。

○同・庭
植え込みの陰に古矢、浅井、実衣、雪乃が話している。オリエ、やってきて立ち尽くす。古矢は浅井と笑顔で話しているが、オリエに顔を向け
古矢「どう？隠れられそうな部屋あった？」
オリエ、目が泳ぐ。